

# 視界360°の研究所は皿盛りおでんのようにだった

— 新日本製鐵総合技術センター（富津） —

小野 英樹 ・ 岩井 隆

東京大学工学部金属工学科修士課程（学生会員）

## プロローグ

平成5年1月28日は何時になく冷え込み、午前中には雪も散らっていた。東京発特急『さざなみ』は思いの外混雑している。目的地君津駅のホームに下り立つと、既に雨は上がり、陽光もちらほらと見え隠れしていた。君津駅から連絡バスに揺られ、君津製鉄所を横目に湾岸に沿って進むこと10分、新日鐵総合技術センターが見えてくる。門を抜けると、まだ幼い植樹の間道が広がり、正面には瀟洒な外観を備えた本館がある。「連載第一回目」という漠然とした不安が頭をよぎる中、本館A19会議室へと足を向けるのだった…。

## 3階建の謎

A19会議室では、今回案内をして頂く田村さんと杉村さんがにこやかに出迎えてくれた。

「はじめまして。」

「はじめまして、よろしくお願いします。」

ほっと一息、まずはビデオとパンフレットでの説明である。（ちなみにこのビデオのナレーションは、某テレビ局の『探検隊シリーズ』でおなじみの人物によるもののため、奇妙な迫力を漂わせている。）

さて、見学に出発するわけだが、最初に屋上で全体を見渡してみることになった。扉から一歩足を踏み出すと、そこは磯風がびうびう吹き荒れる、岸壁に上ったようであり、

「さ、寒い…!!」

後悔先に立たず、ここに来て、自らの薄着に気付くのだった。

杉村さんはこんな寒さにめげず、笑みを浮かべながら、

「(震えながら)あの貝を伏せたような屋根の建物が食堂です。

屋根はチタンで出来ています。」

「(こちらも震えながら)え、何と豪華。」

「(ますます震えながら)天気が良かったら、ここから富士山が見えるんですけどねえ。」

—そう、実は『富士を望む最先端研究施設!!』なのである。ここ(富津)は昔は観光の町であり、海辺にある富津寮(後述)などは拔群のロケーションである。

屋上から見渡すと、全棟3階建以下という低層ビルがディズニールランド2個分の広い敷地内に点在している。建物の色は、人に優しい上品な鼠色(?)に統一されており、

「この研究所は、最初からカラーコーディネーターの先生の指導の元に設計されたものなんです。どうやら最近の流行らしいですね。」

—確かに、幕張辺りの新品のビルディングはそんな色が多いかも。

「室内は間接照明が多いみたいですけど。」

「ええ、これもその一環です。研究所内も各場所で色が統一されています。始めはちょっと戸惑ったけど、全体で見るとうまく調和するものですね。」

そして実は、

「3階建というのも理由があります。」

統計によれば、人が歩いて登るのは3階までで、4階以上になるとエレベーターを使い出すそうである。すなわち、3階建の時に人間の平均自由行程が最大となり、人の交流も増えるだろうというのである。さすが、『開かれた思索の府』のコンセプトを掲げるだけあって、合理的に人の交流を活性化させている。他にも、3階吹き抜けを作ることで異階間での交流を図ったり、研究所の真中に広いセンターコートを設けたりと、様々な気配りが伺える。

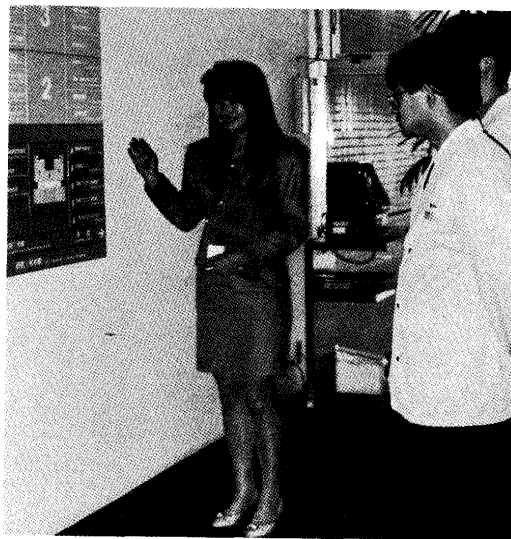


写真1 研究棟の概要を、入社1年目の杉村美江子さん(企画推進室)が優しく初々しく説明。

## おでんを皿に盛る

屋上で体を芯まで冷やした後、研究所内を案内して頂いた。研究所内では、様々な分野の研究施設が混在している。例えば、解析と実験とのリンケージを考えた場合、同じ研究施設内にあった方が遥かに効率が良いのは言うまでもない。

オフィスを覗いてみると、淡いクリーム色の内装で明るい雰囲気を出している。どこか解放的な空気は、制服がないためだろうか。後で聞いた話では、襟がついていれば良いとのこと。それにしても…

「うーむ、机が広い。」

比較してはいけないと知りつつ、遂々比べてしまうのが人情。大学の『鍋に入ったおでん』に対して、『皿に盛ったおでん』とて言うか、各個人に結構広いスペースがあるのは良いものだなあと、感心してしまうのであった。

なお、今回見学した研究施設について簡単に述べると：

- AP-FIM (電界イオン顕微鏡)
- CMA (コンピュータ制御X線マイクロアナライザー)

—前者は原子レベルまでの解像度を持つ顕微鏡であり、物質の構造解析に用いられる。後者はコンピュータとリンクされたXMAであり、元素の分布の様子がグラフィカルに表示できる。

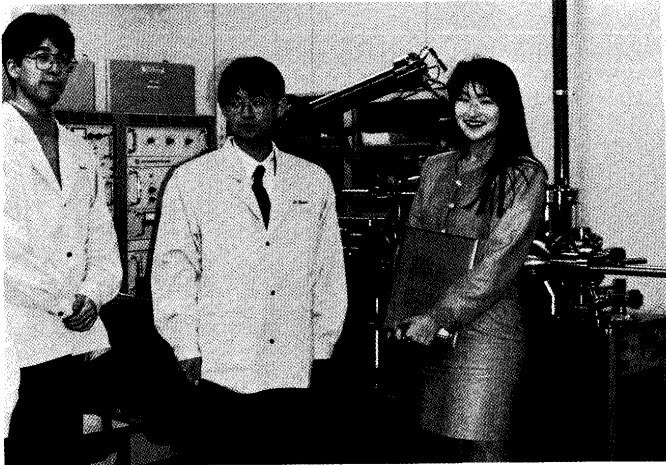


写真2 AP-FIM研究室はこんなところ。岩井(向かって左)、小野(中央)、とってもさわやかな杉村さん

#### ・制振銅板

一洗濯機などで有名な、例の音がしない銅板。実際、見た目は普通の鉄板なのに、叩くと『ぽこん』という鈍い音がする。(なお、本当に簡単にしか述べないのは、筆者がこれらに関して専門外であるという事実に基づいている。)

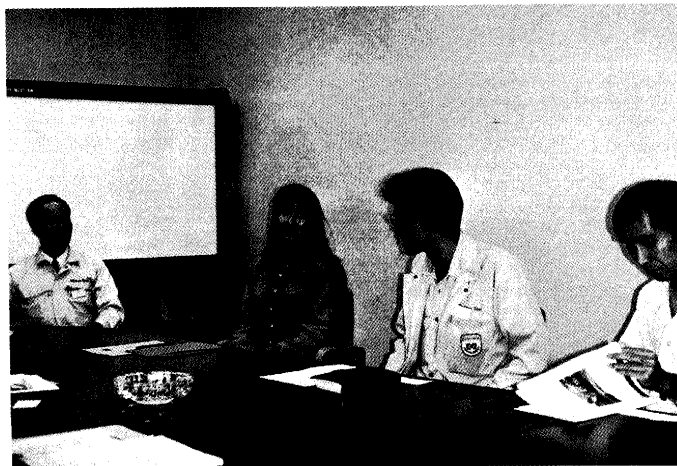


写真3 見学を終え、チタン屋根の食堂を見下ろす会議室で楽しく懇談。向かって左から、田村起光掛長(企画推進室)、杉村さん、樋渡俊二研究員(鉄鋼研究所薄板研究部)、茂木尚研究員(鉄鋼研究所電磁材料研究部)。

#### ゴージャス

一通りの見学を終えてA19会議室に戻り、若手研究者との懇談会となった。今回お話を伺ったのは、薄板研究部の樋渡さんと、電磁材料研究部の茂木さんで、お二人とも現在富津寮にお住いのこと。

実は、懇談の場で最も話題になったのは、仕事の内容よりもむしろ、こちらでの生活に関することであり、とくに富津寮と富津クラブについてであった。富津寮は、総合研究所から車で数分の海辺に位置するワンルームマンションの寮で、ビデオでの映像を見る限り(そして体験談を聞く限り)、ずばり

「ゴージャス」

と言える。東京でこうした条件を揃えるのは至難の技であろう。また、富津クラブとは研究所の片隅にあるゲストハウスのことであり、これもずばり

「ゴージャス」

である。和洋からバーラウンジまで取り揃えている。以前、最近の独身寮は贅沢になりすぎたとかいった(多分にひがみも含まれる)話がよく耳に入ったが、こうした寮などの環境は、これから入る人間にとっては結構重要なファクターになる。人間社会における需要と供給の関係はここでも成り立っていると言えよう。

\*\*\*

富津寮での食事の話や、富津クラブでの忘年会の話など(ほとんど一次的欲求のおもむくまま)楽しく話しているうちに、出発時刻となってしまった。連絡バスで青堀駅へと向かい、再び特急『さざなみ』で東京への帰途につく。東京駅京葉線ホームで、ふと周りを見渡し

「人が多いなあ」

としみじみと感じたのであった。



写真4 帰りの特急を待つ間に、青堀駅で記念撮影。富津周辺は名所の宝庫です。

\*\*\*

最後に、御仕事の忙しい中、色々案内して頂いた田村さん・杉村さん、楽しいお話を頂いた樋渡さん・茂木さんに深く感謝致します。

### 新記事欄『職場ウォッチング』ができました

新しい記事をお届け致します。当会学生会員が大学近隣の研究所・製鉄所を、広報担当の方の案内で見学し、感想を交えて紹介する楽しい記事です。東京大学の小野君と岩井君が、第1回目というプレッシャーも何のその、大変面白い記事を書いて下さいました。年3回程度の連載を予定しています。ご期待下さい。

和文会誌分科会